玖波中だより No.3

大竹市立玖波中学校　令和６年５月３０日

学校教育目標「『なりたい自分』に向かって、挑戦する生徒の育成」

発行責任者　小田　大介　　文責　藤川　健二

体育祭終わる　～感動をありがとう～

快晴の中、５月２５日（土）に体育祭が開催されました。スローガン「限界突破　みんなで　できる！」にふさわしい、競技や応援合戦など，一生懸命な姿に心を打たれました。また３年生のリーダーシップが遺憾なく発揮され、みんなで創りあげた体育祭となりました。感動をありがとう！

体育祭を終えて

○樽の中がワインで一杯になってよかった。大ムカデや大縄は赤に勝ってよかったけど、本番はたくさん練習して勝ったのでよかった。タイヤ奪いやローハイドはたくさん練習して悔しかったです。来年は１年生をリードして頑張っていきたい。（１年）

○練習の時は応援のダンスや演舞での動き、声、腕を伸ばすところ等はまったくできなく、今日も心配だったけど、みんなで一つになって声を出し切って、最後までミスなく踊ることができた。応援は悔いなく満足に終わることができ嬉しかったです。（１年）

○競技も応援も練習の成果を発揮することができました。先輩方が一所懸命頑張っていたので頑張ることができました。最終的に応援優勝ができたので良かったです。W優勝できなかったのは勿論悔しかったので来年度頑張りたいです。全力で最後まで声を出し、動き、表情も工夫して出来たので良かったです。次の体育祭では２年生として今年の何倍も良いパフォーマンスをしたいです。（１年）

○２回目の体育祭でダンスと演舞がみんなについていけるか不安でした。朝練等をしていくうちに、１年、２年みんな上手になってきました。今年は応援優勝が取れましたが、来年は赤組のような優しく分かりやすい先輩になってW優勝したいです。（２年）

○W優勝を目指し団長をはじめ、先生方、同級生からアドバイス等を受け頑張ってきました。練習では勝っていたものが負けて、競技優勝を取ることができませんでしたが、応援優勝することができたので良かったで。来年はこれを越えられるように頑張りたいです。３年生や先生方に感謝です。（２年）

○練習の時は、応援も競技もうまくいかないことが多く、予行は赤組に負けた競技がたくさんありました。でも、声を掛け合いたくさん練習して、大ムカデや長縄で赤組に勝ててとても嬉しかったです。応援では優勝できなかったけど、大きな声を出して、できるだけ大きな動きにできるよう頑張れて良かったです。競技優勝ができてよかったです。（２年）

○中学校最後の体育祭は特に力を入れて練習した応援で優勝することができて本当に嬉しかったです。初めは動きもそろわず、声も小さかったけれど当日は皆「勝ちたい」という気持ちで１つになれたことが１番の成長だと感じました。３年間の最後をこのメンバーで優勝を飾ることができて良かったです。（３年）

○練習では、ずっと負けていた大縄と大ムカデが本番で初めて勝ててとても嬉しかったです。今までの練習を通して、競技も応援もみんなで成長できました。中学校生活の中で初めて優勝できて、最高のメンバーにもサプライズしてもらって感謝してもしきれないほど幸せです。とても良い思い出になりました。（３年）

○協力する力や自分で考えて行動する力が身につきました。初めて応援の振り付け等を見たと時は不安でしたが、協力したり家で練習し、出来るようになりました。また、競技後に列に並ぶ時に下級生に位置を教えたりすることができました。体育祭で学んだことを生かして今後も頑張っていきたいと思います。（３年）

ちょっといい話①

玖波中学校の体育祭の次の日 5/26(日)に玖波小学校で体育祭がありました。翌日、小学校からお礼の電話が入りました。内容は「玖波中の生徒が、大きな声を出して応援してくれたり、競技に参加してくれて盛り上げてくれたんですよ」「閉会式も見てくれて、最後はテントの片付けまで、手伝ってくれたんですよ」というものでした。

私(教頭)も運動会を見に行っていましたが、「中学生が迷惑をかけなければいいがなあ」という思いで、途中で帰らせてもらいました。そんな自分を恥じるとともに、玖波中学校に勤める者として誇らしく思いました。ありがとう。

保護者・地域の皆様へ

体育祭当日は、多くの方にご来校していただき，温かいご声援を送っていただいたことに感謝申し上げます。また，保護者の皆様には，突然のアナウンスにもかかわらず，テントの片付け等ご協力いただきありがとうございました。今後ともよろしくお願いいたします。

開会式・閉会式で『樽』の話をさせてもらいました。生徒以外の保護者・地域の皆様の頭の中は？？？？？？？だったことでしょう。体育祭前の学校朝会でイソップ寓話『樽の中のワイン』をもとに、校長からの講話がありました。裏面に紹介します。

イソップ寓話『樽の中のワイン』より

山奥のユダヤ人の村に、新しいラビ（ユダヤ教における宗教指導者）が着任することになった。
村人たちはラビが着任する日に、祝いの宴を開くことにした。
ユダヤ教会堂の中庭に空の樽を用意し、前日までに村人それぞれが一瓶分の酒を樽の中に注ぎ入れておくことにした。
当日までに樽はいっぱいになった。
新任のラビが到着すると、村人たちはラビを住まいに案内した。
そして、ユダヤ教会堂に案内して、祈りをささげた。
その後、祝いの宴となった。
しかし、どうしたことだろう。
樽から注いだ液体はまったく酒の味がしない。
それはまるで水のようだった。
長老たちは新任のラビの手前、戸惑い、恥じ入った。
突き刺すような静寂が立ち込めた。

しばらくして隅にいた貧しい村人が立ち上がってこう言った。
「みなさんに告白します。実は、みんなが酒を注ぎ入れるだろうから、
わしが一瓶くらい水を入れたって、誰にも分らないだろう。そう思ったんです。」
間髪を入れず、別の男が立ち上がった。「実はおれも同じことを・・・」
その後、次々に、「わしもです。」「おれもです」と言いだし、
とうとう村人全員が同じことをしていたことがわかった。

この話の教訓は「自分一人くらいさぼっても・・・」が広がると組織は崩壊するということだ。
誰かのさぼりや手抜きは、それを尻ぬぐいをする人がいる限りは、表面化してこない。
しかしながら、尻ぬぐいをする人よりも、さぼる人や手抜きをする人が多くなると一気に問題が表面化してくる。

元サッカー日本代表監督の岡田武史さんはこれの類話である「祭りの酒」をしばしば選手に聞かせると言います。
「サッカーのチームが負ける時には、自分一人が手抜きをしてもかまわないという選手が多くいる」そうです。
「強い組織を作り上げるには一人ひとりが絶対に手抜きをしないこと」
が必要なんです。